

令和6年度8020公募研究事業 研究報告書抄録（採択番号 24-2-04）

研究課題：大規模データベースを用いた高齢期のウェルビーイングとオーラルフレイルの関係の解明

研究者名：岩崎正則^{1, 2)}、Agatha Ravi Vidiaratri^{2, 3)}、平野浩彦¹⁾

所 属：¹ 東京都健康長寿医療センター研究所、² 北海道大学大学院歯学研究院 口腔健康科学講座 予防歯科学教室、³ Faculty of Dentistry, Universitas Gadjah Mada, Indonesia

本文

WHO 憲章における健康の定義は「単に病気ではないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態にあること（a state of complete physical, mental and social well-being）」である。この定義に Well-Being（ウェルビーイング）という語が含まれ、疾病や加齢による身体機能が低下しやすい高齢者においても、身体的、精神的、社会的に調和のとれたよい状態、目指すべき姿が示されている。これまでの研究成果と近年の関連分野での知見から、「高齢者の口腔の疾患や歯の喪失による口腔機能の低下（オーラルフレイル）は身体活動、精神的健康、社会参加に悪影響を与え、結果としてウェルビーイングを損なう」との仮説が設定できるが、これまで高齢期のウェルビーイングとオーラルフレイルの関連を評価した研究は我々の知る限り、実施されていない。以上から、本研究では地域在住高齢者を対象とする大規模コホートデータベースを作り上げた上でオーラルフレイルとウェルビーイングの関連を明らかにすることを目的とした。

東京都健康長寿医療センター研究所が有する長期コホート、板橋健康長寿縦断研究（板橋 LSA）の 2023 年調査の参加者を対象とした。オーラルフレイルは Oral frailty 5-item Checklist（OF-5）を用いて判定した。ウェルビーイングは改訂版 PGC モラル・スケール（Philadelphia Geriatric Center Morale Scale [PGCMS]）と Cantril's Self-Anchoring Striving Scale（CSASS）を用いて評価した。

板橋 LSA 2023 参加者 849 名（男性 503 名、女性 346 名、平均年齢 75.8 歳〔標準偏差 3.4 歳〕）を解析対象とし、オーラルフレイルとウェルビーイングの関連を線形回帰分析を用いて評価した結果、オーラルフレイルに該当しない地域在住高齢者と比較して、オーラルフレイルに該当する地域在住高齢者は PGCMS（ $b = -1.409$ 、95%信頼区間 = -1.760 to -1.058 ）および CSASS（ $b = -0.511$ 、95%信頼区間 = -0.738 to -0.283 ）が有意に低かった。

本研究の結果から、オーラルフレイルに該当する地域在住高齢者は、そうでない者と比較して、ウェルビーイングが低いことが明らかとなった。